HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式 : 分詞の統語機能と形態
Author(s)	長崎, 郁
Citation	北方言語研究, 3, 41-54
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52598
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_NAGASAKI.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 3:41-54（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2013）

［特集　動詞屈折形式］

コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式 ―分詞の統語機能と形態―

長 崎　郁
（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究員）

1. はじめに

コリマ・ユカギール語[1]は、ロシアのサハ共和国北東部とマガダン州北部のタイガ地帯で話される言語で、さらに北のサハ共和国およびチュクチ自治管区のツンドラ地帯で話されるツンドラ・ユカギール語と共にユカギール語（系統不明）を構成する。コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式の分類には、研究者により様々な立場がある。いずれの立場でも、定動詞と副動詞の 2 つを設定する点で共通する。しかし、そこにうまく収まりきらない 3 つの形式の扱いが定まっていない。これら 3 形式はいずれも連体節述語機能を持つが、さらにどのような統語機能を持つかという点で違いがあるため、扱いが難しいからである。本稿では 3 つの形式が連体節述語機能を持つという共通点を取り、ひとまず分詞と呼ぶことにする。以下、第 2 節で動詞形態法の概要を述べ、第 3 節～第 5 節で、定動詞、副動詞、分詞の順にその形態的特徴と統語機能を記述する。その上で、第 6 節において動詞からの派生語と分詞の違いを検討し、第 7 節において形態的側面から見たそれぞれの動詞屈折形式の特徴をまとめる。

2. 動詞形態法の概要

コリマ・ユカギール語は接尾辞の付加を主要な形態的手段として用いる膠着的言語である。動詞形態法の概要は表 1 のように示すことができる。動詞は常に「動詞語幹＋動詞語尾（定動詞語尾／分詞語尾／副動詞語尾）」という形をとる。動詞語幹は語根単独、または語根にヴォイスやアスペクトを表す派生接辞が付いて作られる[2]。動詞語尾とそれよりも前に現れる間接証拠、複数、未来の接辞を屈折接辞と考える（複数接辞、未来接辞、動詞語尾は形態的に融合することがある）。動詞の前には否定などの proclitic が、後ろには疑問などの enclitic が接続しうる[3]。なお、サハ語（本特集江畑論文）、ブリヤート語（山越論文）とは異なり、コリマ・ユカギール語は形容詞動詞型の言語である。形容詞的な意味を持つ語幹の多くは動詞として屈折する。

---

[1] 本稿は日本言語学会第 144 回大会ワークショップ『東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式：分詞に関する問題を中心に』（2012 年 6 月 16 日、於：東京外国語大学）における発表に基づくものである。本稿で用いるデータには、(1)ロシア、マガダン州セイムチャンとサハ共和国ネレムノエ村での現地調査で得られた資料、(2)刊行されたテキスト集（Nikolaeva 1989(I, II)、Nikolaeva 1997、Maslova 2001）が含まれる。(2)からの引用の際には出典を示す（引用におけるグロスは筆者による）。表記は原則として音素表記を用いるが、ロシア語からの借用語にはキリル文字をラテン文字に転写した表記を用いることもある。音素目録は次の通り：/p, t, ʃ, t'[tɕ～ɕ], k, q[q～χ], b[b～β～w], d, ʒ, d'[dʑ], g, ʁ, r, m, n, n'[ɲ], ŋ, l, l'[ʎ], w, j, i, e, a, o, u, ɵ/。

[2] 語根の中には単独、つまり派生接辞が付かなければ動詞語幹として機能しないものもある。

[3] Nagasaki（2011）では、品詞分類上これらのクリティックを「小詞（particle）」と見なした。クリティックの中でも少なくとも否定の *el*=、疑問の=*duu* は動詞にも名詞にも接続できる。

表 1 動詞形態法の概要

proclitic	動詞語幹		屈折接辞				enclitic
強調 *me=*／ 仮定 *et=*／ 否定 *el=*／ 再帰 *met=*／ 相互 *n'e=*	語根	派生接辞	間接証拠 *-l'el*	複数 *-ŋi*	未来 *-te*	定動詞語尾／ 分詞語尾／ 副動詞語尾／	疑問=duu など

3. 定動詞の屈折と用法

定動詞は常に主節述語として機能する。定動詞語尾は直説法自動詞・直説法他動詞、疑問法（内容疑問文で用いられる）、希求法（1 人称複数で勧誘、2 人称単数・複数で命令・遠命令・禁止、3 人称単数・複数で願望を表す）に分かれ、いずれの法でも通常は主語の人称・数を標示する[4]。間接証拠と未来を表す接辞は、3 つの法の中でも直説法と疑問法では現れうるが、希求法で現れることはない。以下の (1)と(2)の述語はそれぞれ、直説法他動詞 2 人称単数、希求法 1 人称複数（勧誘）の定動詞語尾をとっている。

(1) *pieter berbekin, tet omot' **aa-mek**, tet omot' **uj-l'el-mek**.*
PSN 2SG よく する-IND.TR.2SG 2SG よく する-IDEV-IND.TR.2SG
「ピエテル・ベルベキンよ、お前はよくやった、お前はよくやったようだ」

(2) *terike, mit t'olʁoraa **lek-ke***
妻 1PL ウサギ 食べる-COHORT
「妻よ、私たちのウサギを食べよう[5]」

(3)の直説法 3 人称複数、(4)の希求法 2 人称複数（命令）のように、複数性が複数接辞*-ŋi* により標示されることもある（以下、この*-ŋi* を動詞複数接辞と呼ぶ）。

(3) *omo-t'e marqil'-pe-ŋoot **kude-ŋi-te-j**, mon-i*
良い-JE 娘-PL-TRANS なる-PL-FUT-IND.INTR.3 言う-IND.INTR.3
「[この子たちは] きれいな娘さんになるだろうよ、[と彼は] 言った」

[4] 定動詞語尾にゼロ形態が想定される場合がある。① 直説法他動詞 1 人称単数、②直説法自動詞 3 人称（動詞語幹が否定のクリティック *el=*、または、間接証拠*-l'el* を伴うとき）、③希求法 2 人称（子音で終わる語幹の後）、④疑問法 3 人称、の 4 つの場合である。このとき、表層では動詞語幹が明示的な動詞語尾なしでそのまま現れているように見える。

[5] この言語では、3 人称の人称代名詞など一部の例外をのぞき名詞には主格と属格の区別がない（注 9 も参照されたい）。そのため(2)は、文中の *mit*（1PL）を主語を表すと解釈し、「妻よ、私たちはウサギを食べよう」と訳すことも可能である。しかし、テキストでは(2)の直前で、夫婦がウサギを子供のようにして所有していた（飼っていた）と語られていること、さらに語り手自身がこの文を露訳する際に、``*Davaj s'edim nashego zajtsa*"とロシア語の人称代名詞属格形を使用していることから見て、ここでは mit（1PL）が後続する名詞を修飾していると解釈し、「私たちのウサギ」と訳すのが自然だと考えられる。

(4) *met* *ʃapadaŋil'-pe* ***tebie-ŋi-k***
1SG ドア-PL 閉まる-PL-IMP
「私のドアたちよ、閉まれ」

4. 副動詞の屈折と用法

副動詞は主として副詞節述語として機能する。副動詞語尾には表 2 に挙げた 7 種類が認められる[6]。表 2 で「同主語」とした形式には、隣接する節の述語動詞と主語が同一でなければならないという制約がある[7]。副動詞には主語の人称・数が標示されることはない。

表 2 副動詞語尾

継起・同時・理由など	継起	同時	条件	欠如	目的	期間
-t	*-dele*	*-de*	*-ŋide*～*-ŋit*	*-t'uən**	*-din*	*-delme*
同主語	同主語	同主語	同主語	同主語		

* 否定のクリティック *el*=と常に共起する。

副詞節では、目的語の格が保持されず主格となることがある[8]。以下の(5)の *t'oʁoje*「ナイフ」が主格（ゼロ形態）となっていることに注目されたい。

(5) *t'oʁoje* ***min-dele*** *ʃukume* ***t'ine-t*** *jolo-do-ʁo*
ナイフ とる-CVB.SEQ 手当たり次第 叩き切る-CVB 後ろ-POSS.3-LOC
qon-i
行く-IND.INTR.3
「[彼は]ナイフを手にして、手当たり次第に叩き切りながら、[彼女の]後ろを歩いた」

主語の人称・数と並んで、時制の範疇も副動詞に標示されることはない。証拠性は条件副動詞でのみ標示可能であり、(6) の文末 *el=kes'ii-l'el-ŋide*「返さなければ」のように、間接証拠接辞を伴った条件副動詞は非現実の仮定を表す（Maslova 2003: 397）。

(6) *taat* ***uuj-t*** ***ʒad'ii-t*** *m=et=el'ed'oo-jek*
このように する-CVB 欲張る-CVB EMPH=HYP=滅ぶ-IND.INTR.2SG

[6] 表 2 の副動詞語尾のうち、期間（「～している間に」）を表す*-delme* ついては副動詞語尾として挙げていない先行研究もある。しかし、この接辞が動詞の末尾に現れると、副詞節述語として用いられるという点で、他の副動詞語尾と同様にふるまうため、副動詞語尾の 1 つと見なして差し支えないと考えられる。また、Maslova（2003: 159）は、*-n'it*（"Connective form"）という接辞を副動詞語尾の 1 つとしているが、筆者の調査では確認できていない。

[7] 目的副動詞には同主語／異主語に関する制約はない。期間副動詞に同様の制約があるか否かは、今のところ十分な例が得られておらず、はっきりしていない。ただし、得られている例はすべて異主語である。

[8] テキスト資料における副詞節の用例では、人称代名詞であれば対格が必ず保持されているが、指示代名詞、普通名詞などその他の名詞では主格が現れる例が散見される。目的語の格が保持されるか否かの条件については、今後さらに調査を進め、詳細を明らかにする必要がある。

el=kes'ii-l'el-ŋide.
NEG=持って来る-IDEV-CVB.COND
「[お前は] そうやって欲張って、身を滅ぼしてしまっただろう、[その魔法の歯を] 返さなければ」(Nikolaeva 1989(I): 116)

副動詞は他の動詞を意味的に修飾するために用いられることもある。また、目的副動詞に限り、*l'e-*「存在する」、*erd'i-*「欲する」、*lorqaj-*「できない」などを補助動詞とする用法が認められる。

(7) *d'e* *tintaŋ* *bogatyr'-gele* ***ataqloo-t*** *kudedie-l'el-ŋaa.*
INTJ 先述の 勇者(Rus.)-ACC ２つである-CVB 殺す-IDEV-PL.IND.TR.3
「[彼らは] その勇者を 2 人で殺した」

(8) ***ʃewrej-din*** *me=l'e-j*
逃げる-CVB.PURP EMPH=存在する-IND.INTR.3
「[彼は] 逃げようとしていた」

5 分詞の屈折と用法

3 種類の分詞が認められる。JE 分詞、ME 分詞、L 分詞と呼ぶことにする。表 3 に見るように、ME 分詞語尾は主語の人称・数を標示する。JE 分詞には主語の人称・数は標示されない。L 分詞の人称・数の標示に関しては、5.2 節、5.3 節で触れる。また、分詞における時制、証拠性の範疇の標示に関し、5.4 節で述べることにする。

表 3 分詞語尾

JE 分詞	ME 分詞	L 分詞
-je	*-me* (1SG) / *-me* (2SG) / *-mele* (3SG) *-l* (1PL) / *-met* (2PL) / *-ŋile* (3PL)	*-l*

3 種類の分詞は、いずれも連体節述語として用いられる。ME 分詞と L 分詞はさらに主節述語としても、L 分詞は名詞節述語としても用いられる。分詞の統語機能の分布を表 4 にまとめる。

表 4 分詞の統語的機能の分布

	JE 分詞	ME 分詞	L 分詞
連体節述語	○	○	○
主節述語	×	○	○
名詞節述語	×	×	○

先に指摘したとおり、これら 3 つの形式は扱いが定まっていない。その理由は 3 形式それぞれの持つ統語機能に差があるからである。先行研究である Maslova（2003）、遠藤（2005）は、JE 分詞を Active Attributive form または je 分詞と呼んでいる。残る 2 つの形式は機能により分類しわけられており、ME 分詞は連体節述語として用いられる場合に Passive Attributive form または me 分詞、主節述語として用いられる場合に Finite form（Object-Focus form）または定動詞（直説法目的語焦点）と、L 分詞は連体節述語／名詞節述語として用いられる際に Action Nominal または動名詞、主節述語として用いられる際に Finite form（Subject-Focus form）または定動詞（直説法主語焦点）とされる。本稿は、3 形式の共通点すなわち連体節述語として働くという点をとり、分詞としてまとめて扱う立場をとっている。

以下、まず、連体節述語、主節述語、名詞節述語の順に分詞の用法を見る。その後、分詞における時制と証拠性の標示について見る。

5.1. 連体節述語

(9)〜(11)は、連体節述語として JE 分詞、ME 分詞、L 分詞が用いられた例である。3 つの分詞間の違いについてはまだはっきりしないところもあるが、ME 分詞には、基本的に自動詞は用いられない、また他動詞であっても主語を関係節化することはできないという制限がある。また、L 分詞は、既知の状況を表す際、または、対比的な状況を表す際に用いられ、多くの場合、主名詞は定であるという特徴をもつ（長崎 2010）。

(9) *kin* ***aa-je*** *legul-ek* *tuben* *oʁoo-l?*
誰　作る-JE　食べ物-FOC　これ　立っている-L
「誰の作った食べ物がここにあるのだろうか？」（Nikolaeva 1989(I): 82）

(10) *taa* ***aa-mele*** *mieste-de-jle* *kʊʒe* *menmeg-ool* *mon-u-t*
そこで　作る-ME.3　場所-POSS.3-ACC　悪魔　跳ねる-NMLZ　言う-E-CVB
nie-nu-ŋaa
呼ぶ-IMPFV-PL:IND.TR.3
「そこで[その悪魔が]作った場所を、``悪魔が跳ねたところ"と呼ぶ」（Nikolaeva 1989(I): 34）

(11) *odu-pe* ***modo-l*** *jalʁil-pe-gi* *t'omoo-d'e* *jalʁil* *oo-l'el*
ユカギール-PL　暮らす-L　湖-PL-POSS.3　大きい-JE　湖　COP-IDEV:IND.INTR.3
「ユカギール人の暮らしていた湖は大きな湖だった」（Maslova 2001: 135）

ME 分詞と L 分詞では、主名詞が連体節の主語以外に相当するとき、所有者人称接辞（*-gi*（主格）／*-de*（主格以外の格））あるいは所有者人称接辞と名詞複数接辞（*-pe*）により、主名詞に連体節の主語の人称・数が標示される。つまり、(10)の下線部のように所有者人称接辞のみがあれば連体節の主語は 3 人称単数、(11)の下線部のように所有者人称接辞と名詞複数接辞があれば連体節の主語は 3 人称複数ということになる。この人称・数の標示は 3

人称に限り、連体節と主節が異主語の場合に任意で起こる。連体節における項構造は、(12)の下線部のように主語は主格と属格の区別をもつ名詞で属格となることがある[9]。また、(13)の下線部のように連体節の目的語は主格となることがある。連体節の目的語が主格となることがあるという点は、副詞節と共通している。

(12) *tiŋ* *paj* *tude* *pulut-kele* *leg-i-te-m* *tude*
この 女 3SG:GEN 夫-ACC 食べる-E-CAUS-IND.TR.3 3SG:GEN
ejre-ʃ-mele *legul-e*
歩く-CAUS-ME.3 食べ物-INS
「この女は自分の夫に食べさせた、自分の運んできた食べ物を」（Maslova 2001: 137）

(13) *n'e=leme-die* ***el=lejdii-je*** *ʃoromo-pul* *tite* ...
NEG=何-DIM NEG=知っている-JE 人-PL ように
「何も知らない人のように...」（Maslova 2001: 144）

5.2. 主節述語

ME 分詞と L 分詞は主節述語としても用いられ、(14)と(15)に見るように、ME 分詞は他動詞目的語に、L 分詞は自動詞主語に焦点が置かれていることを示す（また、(9)においても L 分詞が主節述語として用いられている）。分詞と呼応して、目的語名詞／主語名詞には焦点接辞（FOC）が付加される[10]。(15)のように、L 分詞では主語が 3 人称複数の場合、動詞複数接辞*-ŋi* が現れ、主語の複数性を標示する。

(14) *ooj* *debegej* *lem-dik* ***aa-mele***
INTJ PSN 何-FOC する-ME.3
「ええい、デベゲイは何をしたんだろうか？」

(15) *taa* *ataqun* *ataqun* *bogatyr'-pe-k* ***kimd'i-ŋi-l***
そこで ２つの ２つの 勇者(Rus.)-PL-FOC 戦う-PL-L
「そこで 2 人の、2 人の勇者が戦っていた」

5.3. 名詞節述語

L 分詞は名詞節の述語としても用いられる。名詞節では、L 分詞に付加された格接辞により名詞節の主節の述語に対する関係が示される。分詞語尾*-l* は子音で始まる接辞が後続する際に脱落することが多いが、以下、表層に現れていない分詞語尾をグロスで括弧に入れて示す。名詞節の主語および目的語のとる格は連体節と同様である。

[9] 主格と属格の区別は、3 人称の人称代名詞（*tude*（3 単主）／*tude*（3 単属）、*tittel*（3 複主）／*titte*（3 複属））、および所有人称接辞（*majle-gi*（hair-POSS.3）／*majle-de*（hair-POSS.3:GEN））でのみ認められる。
[10] 固有名詞や所有物を表す名詞（句）などでは焦点接辞が現れず、主格のままとなる。

(16) *marqil'* *tude-gele* *t'uɵte* *mie-nunnu-m,* *tude* ***kelu-l-gele*** *nume*
娘 3SG-ACC いつも 待つ-HBT-IND.TR.3 3SG:GEN 来る-L-ACC 家
jekl'iet
向こうから
「娘は彼をいつも待っていた、彼が帰ってくるのを、家の向こうから（＝ 狩りから）」
（Nikolaeva 1989(II): 6）

(17) *qodoo-ŋi* *uzhe* *bojt'e* *t'iile* ***ulumu-ge***
横たわっている-PL:IND.INTR.3 すでに(Rus.) 完全に 力 尽きる-(L)-LOC
「[彼らは] 横たわっていた、すでに力が尽きてしまって」

名詞節では、格接辞に先行する所有人称接辞（*-gi*、*-de*）、あるいは所有人称接辞と複数接辞（名詞複数接辞*-pe* あるいは動詞複数接辞*-ŋi*）により主語の人称・数が標示されることがある。動詞複数接辞は位格接辞および条件接辞[11]の前で、名詞複数接辞はその他の格の前で現れることが多い（しかし、例外もわずかながら見られる）。このような人称・数の標示は、連体節述語用法と同様に 3 人称でのみ、また、名詞節と主節が異主語の場合に任意で起こる。

(18) *taat* *arnuujaa-die* *oʁoo-t* *joloʁude* *juɵ-t* ***kebej-pe-gi***
そして クズリ-DIM 立っている-CVB 後ろへ 見る-CVB 去る (-L)-PL-POSS.3
juɵ-mele
見る-ME.3
「そしてクズリは立ったまま後ろを見て、[彼らが] 去るのを見た」

(19) *irkid'e* *taat* ***modo-ŋi-de-ge*** *irkin* *ʃoromo*
あるとき このように 暮らす-PL(-L)-POSS.3-LOC 1つの 人
kel-l'el
来る-IDEV:IND.INTR.3
「あるとき、[彼らが] そのように暮らしていると、1 人の人がやってきた」

(20) *tamun* *min-gek,* *amde-de-jne,* *babushka*
それ とる-RIMP 死ぬ (-L)-POSS.3-COND おばあさん (Rus.)
amde-de-jne
死ぬ (-L)-POSS.3-COND
「それを貰ったらいいさ、死んだら、おばあさんが死んだら」

[11] 条件接辞*-gene*（*-gene*～*-kene*～*-jne*）は名詞語幹に後続して現れることはないが、現段階では格接辞に準ずる形式として記述しておく。

名詞節は(17)、(19)、(20)のように、位格接辞や条件接辞を伴うと副詞節として働く。サハ語（江畑論文 4.3）、ブリヤート語（山越論文 4.2）と同様、このような場合、分詞語尾自体に副詞節を導く働きがあるのではなく、名詞節が格接辞の付与により副詞節となったのだと解釈できる。このような副詞節と副動詞による副詞節との違いとして、分詞は人称・数の標示が任意ではあるが可能なのに対し、副動詞ではそれができないという点が挙げられる。また、分詞を述語とする節は主節と異主語となることが多く、隣接する節と同主語であることが多い副動詞と、「異主語」対「同主語」という点で対立する。

5.4. 分詞における時制と証拠性の標示

分詞語尾の前には未来接辞や間接証拠接辞が現れうる。ただし、テキストにおける用例から判断して、その現れ方は分詞の統語機能により異なると考えられる。以下、未来接辞、間接証拠接辞の順に用例を見てゆくことにする。

5.4.1. 未来接辞

未来接辞は連体節述語、主節述語となった分詞には現れうるが、名詞節述語には現れない。(21)、(22)は連体節の分詞が未来接辞を伴った例（(21)は JE 分詞、(22)は L 分詞）、(23)、(24)は主節の分詞が未来接辞を伴った例（(23)は L 分詞、(24)は ME 分詞）である。

(21) ***kel-te-j*** *ʃoromo* *mon-te-j*
来る-FUT-JE=FN 人 言う-FUT-IND.INTR.3
「来る人が言うだろう」

(22) *taas'ilə* *ʃoromə* ***moj-tə-l*** *end'oon-ŋin* *but'un* *qoqs'in-ək* *a-l'əl-mələ*
それから 人 持つ-FUT-L 動物-DAT 様々な 蹄-FOC 作る-IDEV-ME.3
「それから人間が飼うであろう動物には、様々な蹄を作った」（Nikolaeva 1997: 34）

(23) *kin-tek* *tiŋ* *mino-le* ***ejre-t-u-l***
誰-PRED この 筏-INS 歩く-FUT-E-L
「誰がこの筏で行くのだろうか」（Nikolaeva 1989(I): 36）

(24) *taat* *taat* *tet-ul* *lew-dele,* *mon-i,* *met-ek*
そして そして 2SG-ACC 食べる-CVB.SEQ 言う-IND.INTR.3 1SG-FOC
lek-te-mle
食べる-FUT-ME.3
「そして、そして、お前を食べたら、［彼は］言った、私を食べるだろう」

5.4.2. 間接証拠接辞

連体節において分詞が間接証拠接辞を伴うことはほとんどないが、L 分詞が間接証拠接辞を伴った例が 1 例のみ、テキスト中に見いだされる。

(25) *d'e*　*tude*　*gorod-ke*　*joq-to-m,*　*tude*　***kel-ie-l'el-u-l***
INTJ　3SG:GEN　町 (Rus.)-LOC　着く-CAUS-IND.TR.3　3SG:GEN　来る-INCH-IDEV-E-L
gorod-ke
町 (Rus.)-LOC
「[勇士は男を]彼（=男）の町に送り届けた、彼のやってきた（と見られる）町に」

一方、主節における分詞が間接証拠接辞を伴う例は頻繁に見出される。(26)は L 分詞の、(27)は ME 分詞の例である。

(26) *irkin*　*gorod-ke*　*pieter berbekin*　***l'ie-l'el-u-l***
１つの　町 (Rus.)-LOC　PSN　存在する-IDEV-E-L
「ある町にピエテル・ベルベキンがいたそうだ」

(27) *taŋ*　*pulun-die-die*　*kiet',*　*t'olʁoro-loq*　***iidie-l'el-mele***
その　老人-DIM-DIM　来る-IND.INTR.3　ウサギ-FOC　捕まえる-IDEV-ME.3
「そのおじいさんは帰って来た、ウサギを捕まえたようだった」

名詞節における分詞に関しては、まず、主節の述語が知覚を表す場合に、間接証拠接辞を伴う例が見られる。事態が起こったことをその痕跡によって知覚したことを示していると考えられる。また、条件接辞と間接証拠接辞の共起した例があるが、この場合は非現実の仮定が表される。

(28) *terikie-die*　*tiine*　*l'ie-l'el-u-m*[12]*,*　*juө-l'el-u-m,*　*t'olʁoraa-die*
老婆-DIM　さっき　存在する-IDEV-E-IND.TR.3　見る-IDEV-E-IND.TR.3　ウサギ-DIM
ʃewrej-l'el-gele
逃げる-IDEV(-L)-ACC
「おばあさんはさっきあれしたんだ、見たんだ、ウサギが逃げてしまったのを」

(29) *qu,*　*met-ul*　***aŋd'e-ʃ-l'el-gene,***　*m=et=omo-s'*
INTJ　1SG-ACC　目-VBLZ-IDEV(-L)-COND　EMP=HYP=良い-IND.INTR.3
「ふう、（お前が）おれの目を見えるようにしてくれたら良いだろうになぁ」（Nikolaeva 1989(I): 98）

6. 派生語と分詞の違い

コリマ・ユカギール語の分詞を動詞からの派生語と比べると、分詞はより動詞性を強く残した形式と言える。前節で指摘したように、分詞による連体節および名詞節では、主語

[12] 語幹 *l'e-*は自動詞（「存在する」）として用いられる他、適当な語が思い浮かばないときに「あれする」「あれ（が／を）」のような意味でも用いられる。前者の意では自動詞にかぎらず他動詞としても、また、後者の意では名詞としても用いることが可能である。

が主格で現れうる（ただし、属格になることもある）、目的語が対格で現れうる（ただし、主格になることもある）。つまり、動詞の項構造がある程度まで保持される。それに対し、動詞からの派生語では、項構造が保持されないのが普通である。例えば、以下の出動名詞 *juɵ-nu-je*「見るためのもの」では、動作の対象である *n'aat'e*「顔」を対格にすることはできない。

(30) *n'aat'e* *juɵ-nu-je*
顔 見る-IPFV-NMLZ
「鏡（＝ 顔を見るためのもの）」

しかし、動詞からの派生語の中には項構造を保つものがある。例えば、接辞*-ool*「～したこと、～した結果生じたもの、～した場所」による出動名詞（以下、結果名詞と呼ぶ）は、(31)と(32)に見るように、対格目的語をとったり主格目的語をとったりする。また、結果名詞は、(33)、(34)、(35)のように主格目的語をとったり属格主語をとったりする。項構造の保持という点で結果名詞のふるまいは、分詞と変わらない。なお、子音で始まる接辞の後続の際、*-ool* の末尾の/l/は脱落することが多い。

(31) *tet-ul* ***ket'ii-l-ool*** *el=pundu-lek*
2SG-ACC 連れて来る-E-NMLZ NEG=話す-PROH
「［私が］お前を連れて来たことを話すな」

(32) *nume* *arqaa* *n'e=leme* *ojl'e* *losil* ***t'in-ool-get***
家 近く NEG=何 ない:IND.INTR.3 薪 叩き切る-NMLZ-ABL
jien=ben
他の=FN
「家のそばには何もなかった、薪を切ったもの以外は」（Nikolaeva 1989(I): 72）

(33) ***kel-oo-de-gen*** *joloʁude* *kebe-t',* *erpeje* ***kel-ool-gen***
来る-NMLZ-POSS.3-PROL 後ろへ 去る-IND.INTR.3 エウェン 来る-NMLZ-PROL
「［デベゲイは］彼の来た所を辿って戻って行った、エウェン人の来た道を辿って」

(34) *tamun* *momuʃaa* *ʃukedie-n'e* ***aj-l-oo-pe-gi***
それ ロングノースサッカー カワカマス 射る-E-NMLZ-PL-POSS.3
「それ（オオライチョウの羽の模様）は、ロングノースサッカーとカワカマスが射た跡だ」

(35) *meemee* *taŋ* *pajpe-gele* *tude* ***modo-l-oo-de*** *nume-ge*
クマ その 女-ACC 3SG:GEN 暮らす-E-NMLZ-POSS.3:GEN 家-LOC
joq-taa-l'el-u-m
着く-CAUS-IDEV-E-IND.TR.3

「クマはその女を彼女の暮らしていた家に送り届けた」（Nikolaeva 1989(I): 26）

しかし、動詞的範疇をどの程度まで語内部に標示可能かという観点から見ると、結果名詞と分詞には明らかな違いがある。前節で見たとおり、分詞には 3 つの形式や現れた節により違いがあるものの、主語の人称・数、時制、証拠性を標示しうる。しかし、結果名詞にこれらの範疇が標示されることはない。また、名詞複数接辞と所有者人称という名詞的範疇の標示可能性に関しては、分詞の中でも L 分詞を結果名詞と比べることができるが、両者の違いは、L 分詞が連体節述語／主節述語となる際にはこのような範疇を標示できないのに対し、結果名詞は連体修飾(35)、名詞項(31)-(33)、述語(34)のすべての位置で標示が可能という点にある。

7. 形態的特徴から見た分詞

3 節から 6 節までの記述と検討を基に、各々の動詞屈折形式（定動詞、副動詞、3 つの分詞）、および結果名詞のそれぞれで標示しうる動詞的範疇（主語人称・数、未来、格）、名詞的範疇（所有人称・数）を表 5 にまとめる。

表 5　動詞屈折形式と結果名詞に標示される動詞的範疇と名詞的範疇

		定動詞	副動詞	JE 分詞	ME 分詞	L 分詞	結果名詞
動	主語人称・数	○	×	×	○	△* 連体節で×	×
	未来	○ 希求法で×	×	○	○	○ 名詞節で×	×
	間接証拠	○ 希求法で×	× 条件のみ○	?	○ 連体節で？	○	×
名	所有人称・数	×	×	×	×	× 名詞節で○	○
	格	×	×	×	×	× 名詞節で○	○

* 主語が 3 人称複数の場合に限り、複数性の標示がある。

表 5 から明らかなように、「分詞」とした 3 つの形式には、その統語機能にも差があるが、形態的特徴、つまり、どのような範疇を標示できるかという点でも違いがある。形態的特徴の観点から分詞を他の動詞屈折形式および結果名詞と比較すると、次のような指摘ができる。

(a) 連体節述語用法と主節述語用法をもつ ME 分詞は、主語人称・数、未来、間接証拠のすべてを標示しうる点で形態的には定動詞により近い。
(b) 連体節述語用法、主節述語用法、名詞節用法をもつ L 分詞は、一定の制限があるものの、

3 つの動詞的範疇を標示しうる。しかし、所有人称・数、格も標示しうる。つまり、定動詞と名詞にまたがる性格を示す。
(c) 連体節述語用法のみをもつ JE 分詞は、未来を標示しうるが、主語人称・数、間接証拠は標示できないことから、動詞的特徴が希薄である。この JE 分詞の性格は副動詞と共通する。

8. まとめ

本稿ではコリマ・ユカギール語の動詞屈折形式の形態と統語機能を記述し、特に分詞と派生語の違い、形態的特徴について考察した。

コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式は、その統語機能により分類できる。定動詞、副動詞、JE 分詞はそれぞれ、主節述語、副詞節述語・動詞修飾、連体節述語として働き、統語機能が一義的に決まっている。連体節述語／主節述語として働く ME 分詞と、連体節述語／主節述語／名詞節述語として働く L 分詞は扱いが難しいが、連体節述語に加えた統語機能を持つ多機能な形式であると言える。

分詞と動詞からの派生語の区別を、項構造の保持と形態的特徴（動詞的範疇の標示）の 2 つの側面から見ると、出動名詞には、結果名詞のように項構造を保持するものがあるため、項構造の保持が必ずしも有効でないときがある。それに対し、分詞と出動名詞は、主語の人称・数、時制、証拠性の範疇を標示しうるか否かで大きく異なっている。

ただし、形態的な側面から見ると 3 つの分詞も動詞性の面で異なる。すなわち、3 者には、定動詞に近い特徴を示すもの（ME 分詞）、定動詞と名詞にまたがる特徴を示すもの（L 分詞）、より動詞性が希薄なもの（JE 分詞）のような違いがある。

謝辞：本稿の執筆にあたり、2 名の匿名査読者から有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝申し上げます。また、調査にご協力いただいたコンサルタントの方々にも心より感謝いたします。

略号一覧

-: 接辞境界
=: クリティック境界
1,2,3: 人称
ABL: 奪格
ACC: 対格
CAUS: 使役
COHORT: 勧誘
COM: 共格
COND: 条件
CVB: 副動詞
DAT: 与格
DIM: 指小
E: 挿入音
EMPH: 強調
FN: 形式名詞
FOC: 焦点
FUT: 未来
GEN: 属格
HBT: 習慣
HYP: 仮定
IDEV: 間接証拠
IND: 直説法
INS: 具格
INTJ: 間投詞
INTR: 自動詞
IPFV: 不完了
JE: JE 分詞
L: L 分詞
LOC: 位格
ME: ME 分詞
NEG: 否定
NMLZ: 名詞派生
PL: 複数
POSS: 所有人称
PROH: 禁止
PROL: 沿格

PROP: 所有
PSN: 固有名詞
PURP: 目的
RIMP: 遠命令
Rus.: ロシア語の要素
SEQ: 継起
SG: 単数
TR: 他動詞
TRANS: 変格
VMLZ: 動詞派生

参考文献

遠藤史. 2005. 『コリマ・ユカギール語の輪郭 ―フィールドから見る構造と類型』名古屋，三恵社.

Jochelson, Waldemar. 1905. Essay on the Grammar of the Yukaghir Language. *American Anthropologist*, new series 7(2): 369-424.

Krejnovich, E.A. 1979. Jukagirskij jazyk. *Jazyki Azii i Afriki*, III. Moscow, Nauka: 348-369.

Maslova, Elena. (ed.) 2001. *Yukaghir Texts*. Wiesbaden, Harrassowitz.

————. 2003. *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin & New York, Mouton de Gruyter.

長崎郁. 2010.「コリマ・ユカギール語の関係節における 3 種類の分詞」呉人惠（編）『環北太平洋の言語』第 15 号. 富山大学人文学部: 17-30.

Nagasaki, Iku. 2011. Kolyma Yukaghir. Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*. Tokyo, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa: 213-256.

Nikolaeva, Irina. (ed.) 1989. *Fol'klor jukagirov Verxnej Kolymy*, I-II. Yakutsk, Yakut State University Press.

————. (ed.) 1997. *Yukaghir texts*. Specimina Sibirica 13. Szombathely, Savariae.

Verbal Inflection in Kolyma Yukaghir: Functions and Morphology of Participles

Iku NAGASAKI
(ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies)

This paper describes the morphology and functions of verb inflectional forms in Kolyma Yukaghir. It also discusses the grammatical characteristics of Kolyma Yukaghir participles and examines the difference between participles and deverbal derivatives. The main points of this paper are as follows:

(1) Verb forms in Kolyma Yukaghir can be divided into three types according to their syntactic functions: finite forms, participles, and converbs. Although the finite forms, the converbs, and one of the participles (the JE-participle) are monofunctional, two of the participles, the ME-participle and the L-participle, are multifunctional. The ME-participle can be used in adjectival and main

clauses, and the L-Participle can be used in adjectival, nominal, and main clauses.

(2) The distinction between participles and deverbal derivatives cannot always be made by the preservation of the argument structures. Indeed, they have clear differences in the possibilities for marking some verbal categories (person/number of the subject, tense, and evidentiality).

(3) The three participles also vary in the possibilities for marking verbal categories. The ME-participle is formally similar to finite forms. The L-participle exhibits similarities to finite forms and nouns. The JE-participle is similar to the converbs, in that the two forms show few verbal characteristics.

（ながさき・いく　inagasaki@aa.tufs.ac.jp）